

平成29年度入学（社会人入試）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	江崎 玲於奈	創造力の育て方・鍛え方	講談社, 1997年 より	講談社

社会福祉学部

小 論 文 (90分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

われわれが仕事をする上で、自分本来の力、創造性とか独創力というものが十分に発揮できる環境というのはすばらしいことです。そこに人生の生きがいがあるのですから、あなたが見出した自分の才能を信じ、^{しんしゅ}進取の気性をもって自由闊達^{かたつ}に創造力を発揮することに努めねばなりません。

人間は成長する過程でいくつもの選択をします。どの学校に行こうか、自分の素質に合った道は何か、将来どんな仕事や生活が自分に生きがいを与えるか、どんな人と結婚するか、などがそれです。ともかく、自分の運命を決するような選択は自分でやらねばなりません。

ところが、日本の社会では、これら自分の生涯に重要な意味をもつ選択を、表向きはともかく、実質的には他人まかせにしてしまうところがあります。子供の時代をはるかに通り過ぎたあとになっても、自分のことを自分で決断する機会が、また、その必要が少ない社会だからです。熟慮して、自分で決めるよりも、両親や先生、先輩や年長者など周りの人たちにデシジョンメイキング（意思決定）をゆだねる場合が少なくありません。

小さいころは親の判断を鵜呑みにし、学校を出て一人前の社会人になると今度は職場の上司や先輩を頼るのです。このようにデシジョンメイキングの訓練を怠ると、独立精神を持ってない人間ができあがってしまい、仕事上の問題の選択やアプローチの方法など、すべておぜん立てしてもらわないと落ち着かない……そんなタイプの人が、どこの職場にもいるのは日本の社会の大きな特色です。

悪く言えば、これが日本人の“ぬるま湯的性格”を育てる温床となって、日本人特有の“甘えの構造”にも通じています。

親子の間で、親が子供の世話を焼くのは愛情の発露ですから、そこにはさまざまな形があつて当然です。世襲制度のように、自分の職業や地位をやや強制的に子供に継がせようとする親の姿はいつの時代にもあります。逆に、学歴のない父親は自分の犠牲の上に子供を大学へ進学させたいと願います。あるいは希望通りの結婚ができなかった母親が娘の結婚の世話を焼き、自分の夢を娘に託そうとすることも一種の親の愛情かもしれません。

しかし、このような世話焼きを裏返せば、子供の親への依存というよりも、親の子供への依存のほうが強いような気がします。そこから親による子供の私物化という批判が生まれます。多分アメリカ人なら、学歴のない父親は自分が学問をしようとするでしょう。レダーマンというノーベル物理学賞受賞者のお母さんが、75歳になって大学で物理学の勉強をはじめたそうです。そして先生が、あなたは有名なレダーマン博士と何か関係がありますかと尋ねました。彼女が自分がレダーマンの母であると告げると、先生は、さすがにあなたは物理学がよく出来るとほめました。すると彼女は、いや息子のほうが自分より物理学がよく出来るのだ、といったそうです。

たとえば、自分はまずい結婚をしたと判断した母親は、夫と離婚して人生をやり直す道を自分で選ぶでしょう。もちろん、アメリカでも親が子供の面倒を見るのは当然ですし、進学問題などで相談に乗るでしょう。

ただ、これらの場合、子供の意思決定にまで親が介入してしまうか、人生の先輩として単なるサゼ

ッションを与えるにとどめるか。ここで私がいちばん問題にしたいのは、この両者の違いなのです。日本の親の多くは前者であり、アメリカ人の多くは後者です。

話をわかりやすくするために、ここで二つの仮定を設定します。経験に富む年長者はいつでも、どんな問題でも、必ずよい判断ができるのだというのが一つ目の仮定です。さらに年少者は、どんな結論であっても年長者の言う通り素直にベストを尽くすのが幸せに生きる道だというのが二つ目の仮定です。

これら二つの仮定の上に立てば、日本的やり方はそう悪くないでしょう。問題は、この二つの仮定が本当に正しいかどうかです。

日本の社会では、年長者が「最近の若い連中は言うことを聞かない」と嘆く光景は珍しくありません。アメリカの場合は最初から若者に「自分の言う通りにせよ」などと言わないので、こんな苦情もあまり聞かれません。一方、日進月歩の情報化時代においては、私が関係するような自然科学や先進技術の分野はいうに及ばず、社会のあらゆる分野で永年の経験がものをいうことが次第に少なくなってきました。時代の変化のテンポがそれだけ速くなっており、温故知新が通用し難いところもあるという言い方さえできます。

もっと大事なことは、仕事上できわめて独創的なもの、あるいは唐突で結果が危ぶまれるような決断は、若いエネルギーが存分に発揮される時期でないとできにくいのです。そして人はリスクを背負って自分がした決断を実行する時に、はじめて責任を持ち、目的達成に意欲を燃やすものです。

(江崎玲於奈『創造力の育て方・鍛え方』, pp. 78-82, 講談社, 1997年より, 一部改変)

問 作者による日米の比較を踏まえて、「子どもの自立に対する親の役割」について、自分の考えを700字以上800字以内で述べなさい。